

幕末・維新期の島根と「戦場」

岸本 覚（鳥取大学地域学部教授）

1、はじめに

- 幕末のリアルな戦いの姿を文献史料から紹介
- 山陰地域が「戦場」となった長州戦争を素材
- 長州／紀州・浜田・福山・松江・鳥取・当該地域など複数の視点から検討
- とくに「風聞」と「放火」に焦点

参考文献など 先学の成果

全体：河鱒敦編『先考河鱒景岡』（1926年）

矢富熊一郎『長州征伐石州口戦争』（益田史談会、1967年）

三宅紹宣『幕長戦争』（吉川弘文館、2013年）など多数

軍事：竹本知行（その都度記載）など多数

各藩：『山口県史』『松江市史』などの最新の成果

→新たな史料も紹介

2、幕末維新时期山陰方面の「危機」

2-1(1)唐船番隊の設置

寛政期以降「外寇防禦の軍隊」

領地内と隠岐に砲台・遠見番所設置して当番藩士を毎年出張

（『松平定安公伝』91-）

2-1(2)警衛の時代

自らの領域だけでなく枢要な拠点警衛

- 江戸湾警衛
- 大坂湾・京都警衛／禁裏守衛
- 各海岸線の警衛／隠岐の島

2-1(3)対外戦争／内乱の時代

- 四カ国連合艦隊下関砲撃事件／薩英戦争
- 禁門の変／長州戦争（第一次・第二次）
- 戊辰戦争→山陰道鎮撫使事件／隠岐騒動／東北出兵

3, 長州戦争

3-1(1) 禁門の変後の政治状況

- 元治元年（1864）7月23日 朝廷より長州藩追討令
- 同年12月27日 征長総督徳川慶恕撤兵令

長州藩は内部抗争のすえ、「抗幕政権」樹立 三宅紹宣『幕長戦争』（吉川弘文館、2013年）

- 慶応元年9月21日 長州再征勅許
- 慶応2年1月21日 「薩長同盟」

3-1(2) 長州戦争の展開—四境—

- ・ 大島口 6月7日～
- ・ 芸州口 6月14日～
- ・ 石州口 6月16日～
- ・ 小倉口 6月17日～

3-1(3) 石州口戦争

① 益田戦争

- 6月16日 扇原関門にて激突
- 6月17日 益田市街戦
 - 征長軍町家放火
 - 征長軍退却
 - 長州軍益田入り

② 大麻山・周布村戦争

- 7月13日 周布川沿い内村・内田村
周辺で戦闘
- 7月15日 内田村周辺で戦闘
- 7月15日 大麻山戦争
- 7月16日 周布村戦争

③ 浜田城自焼

- 7月17日 長州軍、浜田藩へ要求、同日浜田城で軍議、藩主松平武聰ほか一族等退去
- 7月18日 午後4時 亀山の浜田城自焼
- 7月19日 長州軍城下へ
- 7月20日 銀山領代官鍋田三郎右衛門退去

4、それぞれの「戦場」—長州藩の場合—

4-（1）山陰方面進出の目標

「先日も議論した通り、石州口は祖宗の遺澤、益田等は特に旧恩もあり、（その勝利）を待っているやにも聞いており、何卒銀山を手に入れていただけると、一層の勝利」となるだろう

前原彦太郎（一誠）宛当島宰判都合役田北太中書状

（妻木忠太『前原一誠伝』1934年復刻、マツノ書店、1999年）

4-（2）大村益次郎の構想—専守防衛か攻勢か

- 「防禦線防禦点之大略」
- 「防禦点線の守衛防戦の大略」

大村益次郎先生伝記刊行会編『大村益次郎』（マツノ書店、1999年）

浅川道夫「四境戦争における長州藩の新兵器と新戦術」（『歴史読本』2015年3月）

竹本知行「四境戦争における大村益次郎のリーダーシップ」（『軍事史学』52（1）、2016年）

石州口中隊司令宛大村益次郎書状

「石州口の儀は、先便でお話した通り、力の及ぶだけ大森・濱原口或は袖口（ママ）を防御し、我兵の損失をおさえ、敵・我の動向によって止むを得ない時は、我兵を郷田に引揚げ、敵に大森を譲ってもよい」
「我より大森を攻る時は、大森土人使役に堪えず、人心自ら離散し、戦わずして敵兵奔走に疲れ、内輪瓦解は必然で、これらのことは中隊司令のみ承知しておき、他見無用である」

→防禦点線を明確にして進行／全体の枠組みだけを周知して、あとは戦争の実地司令に委任

→大村益次郎は、無理して攻め込まなくても現地住民の負担が、かえって幕府軍の戦争の継続を困難にすることを察知

→無理しなくても敵は自ら瓦解することを予想

林秀次郎、中谷茂十郎、福間求馬、福原内蔵宛大村益次郎書状大村益次郎先生伝記刊行会編

『大村益次郎』（マツノ書店、1999年）

4-（3）長州藩の戦闘能力

長州藩の慶応期軍事改革

- ・三兵（歩騎砲兵）の充実と士官教育
大村翻訳『活版兵家須知戦闘術門』
- ・新たな銃器などの購入
ゲヴェール銃／ミニエー銃

竹本知行「長州藩の慶応期軍制改革に関する一考察」（『軍事史学』57（1）2021年）

益田戦争の銃撃戦

「我藩（福山藩）の備えは16日の通りだが、敵（長州藩）は古城跡の山に充満し、余兵は山々にちらちら見えた。かくて敵は前日のごとく藪蔭より三、四人程ずつ出ては打ち、隠れては玉込めていた。」

「石州戦争益田戦記（一）福山藩左先鋒吉田隊 大木修蔵実験記、小島啓蔵聞取書」

（森本繁『福山藩幕末維新史』内外印刷株式会社、1982年）

益田戦争

「古城跡山上の敵兵は、ますます益田の町家へ繰り込み模様である。」

→散兵戦術への対応が必須

「石州戦争益田戦記（一）福山藩左先鋒吉田隊 大木修蔵実験記、小島啓蔵聞取書」

（森本繁『福山藩幕末維新史』内外印刷株式会社、1982年）

散兵の現状

「長州藩は散兵を使い、木蔭又は岩の間に潜み、五・六人現れて発砲してはそのまま隠れ、居所が定まらない、軍勢の数も不明で、狙いもつけられない状況である」

〔慶応2年7月勘定所宛鍋田三郎右衛門書付〕「征長一件」『山口県史 史料編幕末維新4』、2010年801頁

散兵戦術の本格的な展開

「長州人は千人ほどの噂で、散兵に分れても、二人位ずつで撃ち、草木の影、百姓家の家根の上などから撃ちだし、身体は頭れず、一場所より二発は撃たない、煙を目印に撃たれるのを嫌い、一発撃つと場所をかえる」

「そして立たずに皆寝込みで行い、元込の筒を多く用いている様子で、山を登り又駈下り、或は家根の上より撃ち、直に飛下り、猿のようである。」

→「機動的な遊撃戦を展開」 浅川道夫「四境戦争における長州藩の新兵器と新戦術」（『歴史読本』2015年3月）

「また、追々詰め寄るに従い、散兵を広く散るようにするため、こちらは多人数の様に誤解してしまう。福山藩の人数は、当初は十分散して展開するが、長州藩に詰め寄られるに従い、追々すばみ集るため、結局長州藩の銃に当たってしまうのである」

→熟練した散兵戦術

「福山藩某書翰抄録」（『幕末秘史新聞薈叢』岩波書店、1995年）

新式銃の効力

「目立つ陣羽織や筒袖などは敵よりよく見えるので、山岡十郎兵衛の指示で目立つ陣羽織を脱せ、木の枝に懸けさせておいたところ、あとで見たところ羽折（織）に玉の跡が数発あった、敵が人と思って撃ったようだ」

「そのため、白色など目立つ筒袖の人は、染させあるいは割羽織の袖を切り捨て上着などにした。三吉（次）に待機している者は、同所で残らず染させた。そして白色の筒袖を着用した者を見れば「白はイケヌゾ／＼」と話した」

「長州人が4～500メートルほどの川を隔て撃つ銃はすべてミニエーなので、尖く飛来するが、こちらの玉は中々届かず（略）追々引き上げた者は甲冑を売払い、借金してもミニエー銃を購入しなければ、戦場へは出ないと、口々に話した」

「福山藩某書翰抄録」（『幕末秘史新聞薈叢』岩波書店、1995年）

5, それぞれの「戦場」—幕府軍の場合—

石州口の編制の特徴

- 山陰石州口手配大名全体を、総督紀州藩主徳川茂承の代理である安藤直裕のもとで統括
- 浜田藩、福山藩、鳥取藩、松江藩などそれぞれの個別領主の軍団編制／意思統一が困難
- 和流の旧式装備を含む混成部隊

5- (1) 安藤勢のふがいなさ

益田方面の急を聞き鎌手まで進軍、敗兵を長州藩兵と勘違いして一戦も交えず逃走、ほかの部隊も態勢を立て直せず総崩れ → 浜田へ退却

矢富熊一郎『長州征伐石州口戦争』（益田史談会、1964年）

『田辺市史』第二巻、通史編Ⅱ、2003年、626頁

芸州口方面にも伝わる

「石州口濱田勢の敗軍を安藤が傍観し、大不和を生している」

→ 山陰方面の諸大名統括が困難

宇和島・吉田旧記刊行会編『宇和島・吉田旧記第二十六輯 宇和島藩幕長戦争史料』（佐川印刷、2007年）103頁

鳥取藩士宗岡泰輔の復命

浜田藩士野嶋平太郎の話として「このとき紀州藩が参戦してくれれば、征長軍全体の氣勢となったものの、残念である。せめて鯨波を揚げてくれれば、寄手の盛り返しもあったのではないかと、残念がっていた」

『贈従一位池田慶徳公御伝記』3-621

5- (2) 征長軍の立て直しとその失敗

6月23日安藤、幕府軍監、松江藩、福山藩、浜田藩首脳で協議

鳥取藩の報告

鳥取藩士岡村喜兵衛報告「福山・雲州・浜田の三藩は、軍議において示し合せたが、安藤に伺ったところ、いまだ返答がなく、三藩とも「大立腹の様子」である、「浜田領内に長州が入り込んでいるうちは、安藤の差図には従わない」として、終に広島表に（そのことが）達せられた」

『贈従一位池田慶徳公御伝記』3-646~7

7月16日大麻山戦争での敗走

結果的には総大将安藤直裕の退却で総崩れ 士気の低下

→ 紀州の敗走が総崩れの原因

『贈従一位池田慶徳公御伝記』3

松江藩も自領が大事

鳥取藩主、出兵を躊躇する松平備前守へ報告「雲州勢も、もはや自分の領国が危機的な状況になってきたので、人数を引き揚げさせることとなった」

『贈従一位池田慶徳公御伝記』3-687~

6, それぞれの「戦場」—松江藩の勝利から考える—

6- (1) 『松平定安公伝』の記述

「内村の民家に巨砲を発し、長州軍は狼狽し、危く同村を脱出して、直に附近の苗村の山上に登る。さらに我軍の射撃に逢い、周章して脆くも四散した」

「当時長州は「短雷装銃」を持っているに過ぎず、我銃隊はこれ対峙し、巨砲を以て敵の潜入を阻止掃蕩せんとし、すなわち人家六七十戸の内村へ放火したのである。これにより長州軍は終に惨敗して、逃れ出て山上に登った。」

「我が藩は巨砲を連射し、その数七八発にして一の虚発もなく、長州軍は愈々狼狽した。その後我彼の

散兵戦となったが、我は彼の慣用手段なる背後の突撃を戒め、山麓の要所を固めながら前進し、終に内村の陣地より約二町進出して、そこに巨砲を移して、続々山上の敵に向けて発射した」

『松平定安公伝』117

勝利の成果

「長州は兵の過半数を失い、戦死者は遂に三十人、負傷者は七十人を出すに至った。それに対して我軍（松江藩）の損害は僅に砲手手伝一人の負傷だけであった。以上から、当時我軍勝利であることが確認できる」

『松平定安公伝』117

6- (2) 幕府側の史料

「松江藩は長州進攻を受け、即時に絶頂から長人屯所へ大砲を打ち込み、小銃を打ち立てた。敵兵は一ト支もなく逃げ去り、器械などを散々に分捕った」

「征長一件」(『山口県史 史料編幕末維新4』、2010年)

6- (3) 松江藩側の史料「雲州御届」

「長州から小銃攻撃があったので、味方より大砲十発ばかり打ち立てた。二三発、長州の屯集に打ち込み、大に敗走、手負等もあるようだが不明、追々逃げ去った。周辺を探索したところ、一旦引取の様子である。」

『近世庶民生活史料 藤岡屋日記』第十四卷(三一書房、一九九四年、94頁)

松江藩士の報告→「雲州御届」

田村豊一：松江藩砲術士

田村豊一の報告がほぼ「雲州御届」の内容と重なる→田村報告が幕府への「御届」の根拠史料

「出張日記」慶応二年(島根県立図書館所蔵桃家文書)

注目点 長州藩敗走中の落とし物

提出分 「帳面一冊、上書・第四大隊三番中隊、上書・長防臣民合隊(議カ)書 完、書翰一通、上書・森生熊市様 阿川彦四郎」

未提出分「紙入、帳面一冊、上書・月俸其外渡差引帳、同一冊、上書、陣中日記一横綴帳二冊、復古類一括、濱長札二十三枚、正銭貳拾八、鎮■散、丸薬・散薬・鍊薬、木札、諏訪大明神御守、かます(きせる、煙草入、兵粮入、笠三)」

「出張日記」慶応二年(島根県立図書館所蔵桃家文書)

(小括1) 松江藩と長州藩

- (松江藩) 史料的な点から言えば松江藩の報告は信憑性は高い
- (長州藩) 敗走中の落とし物を見る限り、慌てていた可能性も否定できない
- 松江藩・福山藩などの砲術力の評価

(小括2) 長州藩側史料

「忠正公勤王事蹟」『防長回天史』「四境戦争一事」等々

→なぜ本戦闘についての記述が少ないのか

☞大麻山浜田藩を孤立させるため 陽動作戦/戦略的撤退?

(小括3) 石州口戦争の特徴

以上、長州藩、幕府、松江藩の戦争における特徴を踏まえながら、さらに福山藩・浜田藩の史料をもとに「戦場」となった地域の動向を見ていく。 →注目したのは「風聞」「放火」

7、「戦場」の風聞と恐怖・不安

7-1(1)福山藩士からみた紀州藩の撤退

「7月13日～17日の戦争は激しいわけではないが、何分紀州藩が極めて臆病なのには諸家も立腹している」「紀州藩六七千で固めていたが、敵の声を聞き、一発もうたず、紀州藩は一里程逃出したので、雲州も叶わないと思ひ逃げた」
「福山藩某書翰抄録」『幕末秘史新聞薈叢』岩波書店、1995

紀州藩士の見た16日の戦闘

(要約)「とくかく敵味方の区別がつかない、戦闘が始まり、玉を込め腕を撫でて今や今やと待っていた。
(略)突然味方が引き上げとなったが、本陣より援兵が来るまで応戦を試みようということになった。」
「しかし、敵味方が分からず、味方だと思ひながらとりあえず曖昧なので一発打ってみた。ところが敵であった。敵は五・七人ずつ散兵で寄せ来て、打ち合うが、(彼等は)伏せたり転んだりしてやってくる。何分大勢だったので前後囲まれ、一旦引き上げることとなった」

戦場の勝敗を分けるもの

紀州藩側：山林などのため敵味方を区別して攻撃→鳥取藩など複数の藩が入り込む

戦術(散兵)による対応の遅れ→散兵戦術への対応の遅れが原因。

☞単純に「臆病」とは言えない

「陣営中雑記」(『田辺市史』第五卷史料編Ⅱ、1990年)

7-1(2)戦場の恐怖—福山藩士の記録

「戦争始めた頃、一発も打ち出さず逃げ出だした者は、骨柄も能く槍剣も免許済みで、平日大言をはく男であった。このたび小銃隊に所属したが、三次まであとも見ず逃げた」

「仲間が諭して介錯を頼み切腹ということになったが、(恩情により)先ず差し控えとなった。(中略、彼は)先陣へ戻り、恥辱を雪ぐことを目指したが、矢張震え居り、役には立たず、戦争は遠方より打ち合いのみで、湯水を呑むにも震えている有様である」→恐怖の戦場

「福山藩某書翰抄録」(『幕末秘史新聞薈叢』岩波書店、1995年)

戦場での恐怖

こうした戦場での恐怖は、戊辰戦争でも…

秋田の戦場近くに派遣された松江藩士にも戦闘が近づくと精神状態に支障をきたす兵士が続出

→戦場での特殊な状態がもたらす「風聞」

7-1(3)風聞—紀州藩士の記録から

6月16日「浜田到着、高津(江津カ)に奇兵隊千人寄せ来るとの情報で市中が大動揺し、浜田城やそのほかの警固にあたった。動揺は大きく、傍観することができないので大砲の準備にかかった」

→「奇兵隊」と勘違い

矢富熊一郎『長州征伐石州口戦争』(益田史談会、1964年)

「陣営中雑記」(『田辺市史』第五卷史料編Ⅱ、1990年)

「又々、長州勢の軍艦が入津したとの情報が入り、是又一方ならぬ動揺となった。しかしながら、右軍艦の義は全く雲州の兵糧米積が来ただけのことであった」

続いて、6月17日には浜田軍、福山軍敗走の連絡→さらに不安は高まる

「陣営中雑記」(『田辺市史』第五卷史料編Ⅱ、1990年)

戦闘前における精神状態

いつ来襲かわからないことへの不安・恐怖

風聞に振り回される人々

味方の敗走の情報がもたらす兵士の精神状態

→常に不安と恐怖の連続

6月18日「奇兵隊が買船で入津してきたということで、市中その外は大動揺となった。紀州藩もそれぞれの持ち場を固めた」、また「長州藩が長浜え襲来したというので夕方より翌朝まで野陣して固めたが、全くの虚説であったようで、長州が来ることはなかった」「陣営中雑記」(『田辺市史』第五巻史料編Ⅱ、1990年)

7-(4)風聞(全国)

「八月十八日 風聞」

「一長防の形勢は益々猛烈となり、破竹の勢で幕勢は大敗が続き言語道断であると云う、石州口の大敗も続き、雲州も落城なりと云う風聞あり、不詳」

「吉介翁自筆見聞雑記(抄)」『山口県史』663頁

出雲あたりの風聞

「このあたりにも種々の噂を取り沙汰されているが、是又虚説が多いので記載しない」、「六月前後には種々の噂があったが、あまりに虚言が多いのでここには書き記さない」

→情報の選択

(島根県立図書館所蔵「慶応二丙寅六月十三日 出陣万日記 慶応元年乙丑九月長州再乱之義ニ付見聞覚書 田中朝房」)

能義軍能義村田中精一より写

風聞(出雲国内)

「長州大島と申す所は三千軒余あったが、幕府軍が島へ大筒を打かけて、大島三千軒も焼き払われた」

→住居が焼失する恐怖

→生活が脅かされている

(島根県立図書館所蔵「慶応二丙寅六月十三日 出陣万日記 慶応元年乙丑九月長州再乱之義ニ付見聞覚書 田中朝房」)

能義軍能義村田中精一より写

出雲国内でも風聞

「長防二州の者は、たとえ急ぎの僧侶や商人であっても国内に入れてはならない」

「長州から雲州への切り込みには、まず鰐淵寺に立てこもることが専要」 島根県立図書館所蔵「鰐淵寺記録」

8, 放火からみた山陰の「戦場」

8-(1)戦略的な放火

益田戦争での放火1

「古城跡山上の敵兵(長州藩)はますます益田の町家へ繰り込み来る模様である。故に我より町家に火を放ち、敵の後を絶たんとて浜田藩に相談したところ、浜田益田(ママ)とも同意した」

「石州戦争益田戦記(一) 福山藩左先鋒吉田隊 大木修蔵実験記、小島啓蔵聞取書」

(森本繁『福山藩幕末維新史』内外印刷株式会社、1982年)

益田戦争での放火 2

「町家の鍛冶屋より吹革を取り、急いで焼玉を作った。(中略) 弾丸をつめ、その手前に毛氈を微塵に裂いて入れ、焼玉を砲内に転がし込むと、巧みに発砲した」

益田戦争での放火 3

「これは、かねての福山藩砲術家日村流の秘伝を用いたものである。この焼弾にて町家を焼き払えば、町家の蔭より狙撃せし長州兵も死傷してしまうであろう」

「石州戦争益田戦記(一) 福山藩左先鋒吉田隊 大木修蔵実験記、小島啓蔵聞取書」

(森本繁『福山藩幕末維新史』内外印刷株式会社、1982年)

8- (2) 松江藩側の史料「雲州御届」

「長州から小銃攻撃があったので、味方より大砲十発ばかり打ち立てた。二三発、長州の屯集に打ち込んだところ、(敵は) 大に敗走、手負等もあるようだが不明、追々逃げ去った。周辺を探索したところ、一旦引取の様子である。」

「その後敵が再び同村の山上より下り、小銃を打ち立てるが、味方よりも大小砲で激しく打ち立て、追々敵は遠く退去した。だが、猶人家或は藪蔭等に潜伏している様子なので、内村へ人数を出し、人家を放火させ燃えあがると、賊徒は騒ぎ立て、火勢が盛となると、敵は敗走、残らず退去、熱田へ引揚となった。」

『近世庶民生活史料 藤岡屋日記』第十四卷(三一書房、一九九四年、94頁)

田村報告にみる放火

松江藩が散兵による長州藩の攻撃に対応するため放火を実施

→長州藩の軍事戦略への対応策として征長軍全体で共有された方法

8- (3) 民衆側からみた放火

「昨日、本郷の人家が焼けたのは、砲火ではなく、みな附火である。そのため百姓一同大に歎き悲しんだ。このうえ残りの人家も、敵が入り込み、(それに応じて) 火矢・焼玉等を打ち込められれば、軍の習とは承知しているので誰を恨むこともできないだろう」

「(しかし、) 昨日のように火を付けて焼けば、領民の人気を害って、「御上様」を恨むようになり、愚痴をこぼすものが出てくるから、以後は附火を停止するような工夫をお願いできないかということになった。成程尤の事として、急ぎ御上へ訴えようということになった。」

『岸静江とその時代 激動の幕末と浜田藩』(浜田市教育委員会、展示解説書、1997年)

地域住民にとっての放火の受け止め

- 一方では、合戦ならばやむを得ないこととして受け入れている
- その一方ではこれ以上放火が続けば、領主に対して良い感情は持てないので、放火による戦術は回避してほしい

8- (4) 長州藩側の放火に対する考え方

大島口方面の幕府軍→徹底した放火作戦

宇和島藩主伊達宗徳届書：「無罪の民家を放火し、無敵之村落へ砲発」と幕府軍放火批判

後日松山藩は、長州藩に謝罪

三宅紹宣『幕長戦争』(吉川弘文館、2013年)

放火批判による民心収攬策

「長防士民より雲州え差越侯書文之写」

→有名な「長防臣民合議書」とあわせて、長州藩側の正当性をアピール

「長防士民より雲州え差越侯書文之写」

「6月7日より蒸気船で長州領内の上ノ関辺りを砲撃し、十日後には大島郡久賀・安下庄等え乱入し、人家を放火し無罪の老幼を殺戮し、米金を掠奪し、婦女を奸姪する等之所業、実に堂々たる天幕の御命令では決してない」

『近世庶民生活史料 藤岡屋日記』第十四卷（三一書房、一九九四年、94頁）

出師檄（中略）県令条々

- 一、難儀のものは遠慮無く訴え出ること
- 一、兵火のため難渋飢渴の村々は、訴え出れば速に対応すること
- 一、兵士の乱妨を堅く禁止、速に訴え出れば、きっと厳科に処する

「四境戦争一事」『山口県史』737、739-740頁

民衆側に立つことをアピール

「このたび幕府兵が領内え乱入し、無辜の人民を殺戮し米穀を掠奪し、不正不義の所業を働くため、やむを得ず二州（周防・長門）士民申し合せ、義兵を起してこれに応ずるものである（後略）」

「四境戦争一事」『山口県史』737、739-740頁

離れる民心を誰がつかむのか一大村の戦略

「小瀬川口の儀は（略）敵（幕府）兵は必ず海上・陸地両道より攻めて、小方・久波両所を放火することは必定である。久波・小方を敵兵の手によって焼き払った時、人民の恨みはすべて敵兵に帰すことになる」

林秀次郎等宛大村益次郎書状（前掲『大村益次郎』）

芸州口戦争の火災

「焼き払いにより人家がない時は、苦坂より二十日市まで人家は無く、敵兵は宿陣する場所がない。だが自らの兵を固守する時は敵兵は退くことができず、滞陣する時は芸州人民の苦労は大きく、必ず芸人と不和を生じる」

「つまり戦はずして芸州地の敵兵は退きことは必然である（中略）これらのことは、石州に戦争の主意も参考にされてはいかがか。」

→放火された地域住民の恨みと、滞陣の負担による不和により幕府軍は撤退

→長州は戦わずして勝利できる

林秀次郎等宛大村益次郎書状（前掲『大村益次郎』）

8-（5）浜田落城後の認識—長州・住民

「浜田藩主も余程切迫して自焼したのであろうが、市中までも焼き払うことは「実に暴の極み」、最前には紀州兵が出張で暴を極めた。その上一戦に敗走して浜田城に駐屯したが、(彼等に)防禦の心も無く、結局銀山へ逃げ、殊に安藤飛州は前日船にて遁げたそうだ」

「これには浜田藩主も紀州に怒りをあらわにし、紀州敗走には、領中へ沙汰し、食事・宿等厳禁させた。紀州兵も大困窮し、途中にて槍刀を投げ捨てて走り、飢えに堪えず畠の木瓜・カボチャを喰らう始末である。紀州の「暴」のため浜田藩主も短慮の策を廻らされたと見える。」

前原宛山田宇右衛門書翰（妻木忠太『前原一誠伝』マツノ書店、1985年、1934年復刻、370-1）

「だが、浜田藩主とその一族も因州、その他家来も播州に壱万石の地があり逃げたと聞いている。このように紀州藩の「初暴」、浜田藩の「後暴」で、住民は大に怒り、長州を快く迎えてくれた。因らずも二戦にて石州一円平定の姿となった。石州には紀・雲・因・福山等の兵がいるが最早その勢はない。」

前原宛山田宇右衛門書翰（妻木忠太『前原一誠伝』マツノ書店、1985年、1934年復刻、370-1）

浜田藩主とその一族の脱出

7月18日八雲丸にて浜田脱出「(七月)十八日浜田城は自焼となり、家中は雲州・因州へ落ち行き、惣ての征戦勢は引き上げとなった」

→杵築、松江、鳥取／鶴田藩

「慶応二寅六月 日記留」(個人蔵)

同情する領民

「黒煙が天を覆い…何にたとえることもできない。我ですらこのような状態である。舟中陸路を行く殿様始め家中の人々の思いもさぞ残念に思われているだろう」

『岸静江とその時代 激動の幕末と浜田藩』(浜田市教育委員会、展示解説書、1997年)

浜田城の焼失と、藩主家族の脱出

「実に気の毒千万のことで、二百年來こんなことはなく諸人の眼を驚かせている」

島根県立図書館所蔵「鰐淵寺記録」二〇

8- (6) 民衆の負担と怒り—民心の帰趨

- 戦場周辺地域の負担『松江市史』通史編
「梅干・味噌・草履・草鞋・松明・割木・干草・大豆等」の調達
- 荷物の輸送／「異変」対応
- 領主権力不在による治安悪化（一揆の続発）
- 度重なる人夫などの動員→そのうえ放火

「長州最眞」1

「日本の大半は長州寄りの風があると、どこの人も話している」「民衆は、幕府軍が通過するときには涙ながらに見送りながら、通過するとすぐに長州様はとてすばらしい豪傑だ、どうか勝利して下さいと神にも祈るほどだった」

「松氏春秋」(『大和村誌』、前掲『松江市史』通史編)

「長州最眞」2

「この辺りの人民は路傍に手を合せて、「長州神様」と申すくらい、たいそう帰服し、是は安藤兵の余りに粗暴なことに由来するものであろう」

「四境戦争一事」『山口県史史料幕末維新』3-747

8- (6) 紀州藩兵の実際

7月22日「吉舎宿には福山藩の人数が宿陣していたので、余義なく三良坂に宿陣となった。しかしながら、夕方に到着したが一向に市中の者が取り合って呉れない」

「陣営中雑記」(『田辺市史』第五卷史料編Ⅱ、1990年)

「一軒ずつ戸を締め切り、我々が買物等をしようと思って戸を叩いても、ただ何もなくて皆々当惑した」

→連日の宿手配の難渋、食料調達も困難

→地域住民の負担と放火などの戦略が民心喪失へ

→民心掌握の有無が敗者の戦場の生死を決定

おわりに

- 長州戦争／石州口戦争の特徴
- 複数の視点と、テーマから考察
- 課題：山陰地域の戦場のリアルをいかに表現するかは非常に難しい
- 先学に学びつつ、新史料の発掘が望まれる